

個展ステートメント

Lake Breeze

どういうわけか、冬は他の季節とは異なり、長く感じるのは私だけだろうか。今年の冬も長かった。けれどそんな冬ももうそろそろ終わりを迎えそうである。私の住んでいる千葉の手賀沼では、3月の初めによく雪が降った。しかしそれが降り積もることはなく、その日の夜には雨へと変わってしまった。長かった冬の最後に、あまり積雪のない地域での非日常とも言える雪景色を楽しもうと思ったのだが、世の中はそう甘くはないようである。結局翌日には雪が解けた後の泥だらけの地面だけが残ってしまった。雪が降り始めた際に、手賀沼の夕暮れをほんのひと時散歩できたことが、せめてもの救いであった。

私が手賀沼の辺りに移り住んだのは3年前のことだ。手賀沼は東京から最も近い天然湖で、大正から昭和初期にかけて別荘地として栄えた。その小さな湖沼にはかつて志賀直哉やバーナード・リーチといった文化人が居を構えたこともある。手賀沼はこぢんまりとした風光明媚(めいび)な場所なのだ。私はそんな水辺の公園を日が傾く頃に散歩することが多い。一年を通して大抵の場合は風が穏やかで、その時間になるとほんの細かな波が黄みがかかった太陽の日差しを優しくきらきらと反射している。空の色が湖面を染め上げ、世界全体がノスタルジックな色調になるのも美しい。また手賀沼には野鳥も多く、丸々と太った白鳥や、真っ黒な体に朱色の目をしたオオバンが湖面を行き来したりしている。人が少ない沼岸では、カワセミの青い光沢が視界の隅を掠めるのも、ここではよくあるのだ。そんな水辺の景色を眺めるのが、私のここ数年の日暮れ時の楽しみの一つである。

長い冬が終わろうとしている。手賀沼の遊歩道では、しばらくすれば数百本もの桜が花を咲かせることだろう。手賀沼の冬自体は決して嫌いではないが、暖房設備の乏しいアトリエで制作する我が身にとっては、春の到来は喜ばしいことだ。絵筆を持つときに、冷たくなってかじかんだ手の心配をしなくてもよくなるのだ。気温が上がれば、油絵具の乾きも早くなる。暖かい季節は、制作が俄然はかどるのだ。葦が枯れ、木々が葉を落として落ち着いた色彩を見せてくれた手賀沼の冬にさよならをすまし、春風の中の遊歩道をサイクリングする準備でもしようと思う。夏にかけて羽虫たちが鬱陶しくなるのはいただけないが、それはそれで楽しめるように努めるつもりだ。

四季折々の穏やかな水面、吹き抜ける風の匂い、目の端でちらりと輝く太陽の光。こうした繰り返し訪れる美しさが、私の創作の動機であり、モチーフである。我々生物は太古の昔から、生まれ、老い、そして息絶えるという流れを繰り返してきた。人々は抗えないその潮流に時に焦り、また哀しみを感じて、幸せを取りこぼしてしまうことがある。ただそんな時こそ、何気ない日々のきらめきが、立ち止まってしまいそうな人の目を潤すのだと信じている。

日常のちょっとした自然の美しさを、私の絵を通じて感じていただければ幸いである。